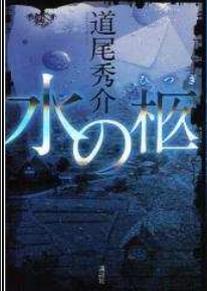
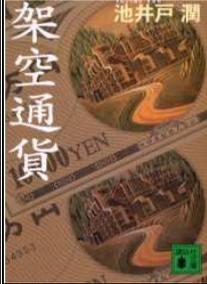
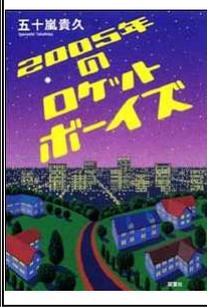
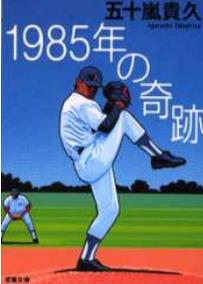
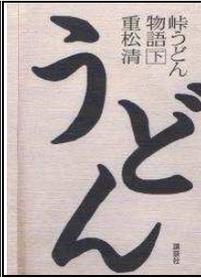
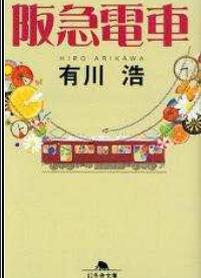
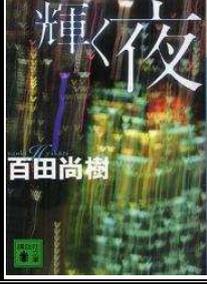


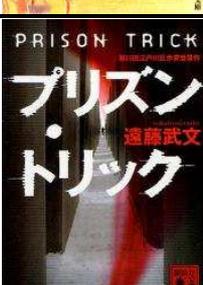
001 健

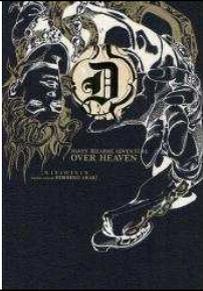
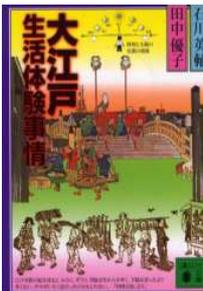
	読書日 2011年	タイトル	著者 出版社	表紙	コメント	評価
1	1031- 1104	水の枢	道尾秀介 講談社 1,575円		過去の作品は読後に憂鬱感が残るものが多かったが最近は少し明るいイラストに変わってきている。 老舗旅館の中二の少年がダムの中に沈んだ村にゆかりのある友人・家族らの捨て去りたい過去に触れ痛みを知り共に乗り越えようと成長していく物語。	
2	1107- 1112	架空通貨	池井戸潤 講談社文庫 730円 (古230円)		流通通貨と異なる独自の貨幣の流通する町。一つの企業に依存する町。かつての藩札、軍票といったもので最近でも「円天」という擬似通貨詐欺もあったぐらいだから昔も今も人の考えることは変わらない。この話の中では今の金融業界に詳しい著者が現代に流通できるしくみを具体的に構築しているあたりが読み応えのある所。	
3	1111- 11xx	野性時代 2011年12月号	角川書店 680円		東野圭吾ナミヤ雑貨店シリーズ完結編「空の上から祈りを」掲載。過去に掲載された4つの作品が時系列的にすべてがまとまる形で完結。 東野圭吾には今までなかったしっとりじんわりと来る作品でもう少し続けて欲しかった。 3月27日に「ナミヤ雑貨店の奇跡」というタイトルで単行本発売予定。	
4	1113- 1115	1995年のスモーク・オン・ザ・ウォーター	五十嵐貴久 双葉社 1,680円 (横浜中央図書館)		2012年2月に封切りとなる「ウタヒメ彼女たちのスモーク・オン・ザ・ウォーター」にZARDの曲が主題歌に使われるとあって読んだもの。 身の周りの話、お約束ギャグを入れたストーリー運びは典型的で軽い。4人の訳有り中年女性がロック・バンドを結成し、会場で演奏しようというもののほとんどゼロからの挑戦。前半は軽いが後半は熱が入ってきてそれなりに読める。 一途な姿を人に見せるのはカッコ悪いと思う世代だが実は一生懸命なのは嫌いではない。	
5	1115- 1117	2005年のロケットボーイズ	五十嵐貴久 双葉社 1,680円 (横浜中央図書館)		「ロケットボーイ」は米国・炭鉱町を舞台に少年たちがロケットを打ち上げた実話に基づく作品。題名はそれに因んでいると思われる。本作品では落ちこぼれ高校生が人工衛星を自ら作り、つてを辿って打ち上げにこぎ着ける。ちょっとありえないくらい都合よすぎる登場人物のオンパレード。軽すぎるが針の孔を通すような具体的な可能性の積み上げ(人工衛星の設計、組み立て、ロケットの調達、性能テスト)は結構興味を持って読める。	

6	1119-1121	1985年の奇跡	五十嵐貴久 双葉文庫 700円 (横浜中央図書館)		前掲2作品と本作を合わせて著者の奇跡もの3部作というらしいのでついでに読んだもの。落ちこぼれ野球部に一人の天才投手が転校してきたことから甲子園を目指すことになる。しかしこの天才投手には意外な秘密と弱点があった。高校生対象の軽いのりの妄想小説の類だが後半はシリアスになり読者をひきつけるところがこの作家の持ち味かもしれない。
7	1121-1122	オルゴール	朱川湊人 講談社 1,785円 (横浜中央図書館)		老人からオルゴールを鹿児島知人に届けてくれないかと打診されたハヤト少年は駄賃欲しさに安請け合いするが老人は死んでしまう。反故にするつもりだった約束が負担になってくる。ひよんなことから鹿児島への旅が実現する途中で原爆、福知山線事故、震災のことなど「知り合った人たちから自分の目で見えて考える、肝心な事から逃げない、人とのつながりを大切に思う気持ちを知る。
8	1123-11xx	オール讀物 2011年12月号	文藝春秋社 950円		宮部みゆき「三島屋変調百物語 泣き童子」掲載。
9	1124-1128	最終退行	池井戸潤 小学館文庫 690円 (古300円)		いつもの銀行内の派閥争いに加えM資金、マネーロンダリング、宝探しなど意外な方向へ発展。出だしのつかみは引き込むには充分。広げすぎの感もあるけどそれなりに辻褄は合わせている。それにしても池井戸潤の描く妻はいつも悪妻が多いなあ。欲深き者の化かし合いが読みどころ。
10	1129-1129	空飛ぶタイヤ 【上】	池井戸潤 講談社文庫 690円 (古340円)		上下巻合わせて1,000頁近くあるものの面白くて一気読み。社内外を問わず他部署と交渉する難しさや相手の態度に腹を立てたサラリーマンは少なくないと思う。その辺りの悪役の描き方は本当にうまい。読んでいてふつふつと怒りが込み上げてくるほどだ。ストーリーは2002年に起きた三菱自動車の大規模トラックの脱輪事故とリコール隠しを下敷きになっている。
11	1130-1130	空飛ぶタイヤ 【下】	池井戸潤 講談社文庫 690円 (古340円)		事故を起こした運送会社の社長が自社の無実を証明するため巨大企業に立ち向かう。マイケル・サンデル「これから正義の話をしよう」を読んで間もなかったのが企業の利益追求、自己保身の姿勢にも憤りを感じた。

12	1203-1206	平成猿蟹合戦図	吉田修一 朝日新聞出版 1,890円 (1,140円)		登場する人物は結構多いが根は人のいい人物ばかり。はじめは誰が誰を懲らしめるのかよくわからないし猿蟹合戦の構図になっていない。軽い。人間関係と設定が調子良すぎて実感が伴わない。何だっってこんなタイトルを付けたのか。
13	1206-1208	峠うどん物語図	重松清 講談社 1,575円 (古850円)		麺好きなのでタイトルに惹かれるのは当然だが一風変わった設定に驚き。店の名は元々は「長寿庵」だったが向いに市営斎場ができたことから客足が遠のき名前も「峠うどん」に改名する。今や斎場に訪れる人を相手に老夫婦が細々と営み中学生の孫娘が時々手伝っているが両親は快く思っていない。人の最後を見送る人々を孫娘の視点で語られ時に疑問・不満が老夫婦に投げかけられる。
14	1208-1210	峠うどん物語図	重松清 講談社 1,575円 (古850円)		頑固者の祖父は口には出さないが無言で答える。それをフォローする祖母。死に向きあうことにより生きることの意味合いを心に刻みながら成長していく孫娘。物言わぬ文化がここにはある。
15	1211-1211	阪急電車	有川浩 幻冬舎文庫 560円 (古250円)		表紙のほのぼのの感に釣られて購入。初めて読む作家。「浩」は「ひろ」と読み女性とは思わなかった。片道わずか15分のローカル線なれど各駅から乗ってくる人々にはさまざまな生活と思いがある。それらが少しずつ関わって恋の始まり、別れなどさまざまな物語が生まれる。往路の各駅で関わりが生まれ折り返しの復路で結末が順次描かれていて甘々だけどほんわか気分には浸れる。
16	1211-1212	囲碁名棋士たちの頭の中	荒谷一成 中経出版 1,470円 (横浜中央図書館)		新聞記者である著者が10年半ほどの取材を通して接したトップ棋士の人柄、感性、人生観、失敗談など成長の過程とエピソードを紹介。高三の時に囲碁を覚え読物も結構読んでいたので目新しい話はあまり無いので物足りないが最近の若手トップや女流棋士も掲載し多彩なところは良かった。
17	1213-1216	ハードボイルド・エッグ	荻原浩 双葉文庫 730円 (横浜中央図書館)		題名を信じて読み始めたもののマーロウを気取った探偵が主人公のパロディもなかった。ほぼ便利屋状態の探偵とおしかけ秘書の謎の婆さんとの掛け合いがミソのようだがなりきりでマーロウの言動をパロっているのはいいが延々と続くのは読むのが辛い。

18	1213-12xx	野性時代 2012年1月号	角川書店 680円		柳広司のジョーカー・シリーズ「ケルベロスの犬-前編-」を掲載。
19	1217-1218	神保町の怪人	紀田順一郎 東京創元社 1,785円 (横浜中央図書館)		表紙の人形は永井荷風。 著者は古書収集家として知られており本にまつわるコラムでよく目にする。その著者が古書収集の現場で出くわした奇人、友人をモデルに愛書家や収集マニアが引き起こす事件をミステリー仕立てにしたもの。なりふりかまわぬ収集手段やマニアの気質が窺えて面白い。
20	1219-1229	天魔ゆく空	真保裕一 講談社 1,785円 (古500円)		足利尊氏と織田信長の間を書いた時代小説はあまり無かったせいか主人公の細川政元の事は全く知らなかった。出自に問題のあった政元は幼少時より冷めた感性を持ち自らはトップにならず常に傀儡政権による支配を心がける。その気配りや一族、部下、支配層など多岐に亘り、そこまでして家を保つことに虚しさを感じる。面白いのは神輿として担ぎ上げられたトップの気持ちや奇立ちが分かりやすく描かれているところ。
21	1230-1231	怪談	柳公司 光文社 1,470円		柳広司のパロディ物は好き嫌いとはもかく原本の間にうまく違う解釈のストーリーをすべり込ませる手腕にあるのだがこれはどうか。 ラカディオ・ハーンの「怪談」を元に現代ものの怪談ミステリー6作を創作。それなりに出来ているが原作の面白みが感じられないのが不満。 「むじな」「ろくろ首」「雪おんな」「食人鬼」「鏡と鐘」「耳なし芳一」などポピュラーな話を使ったところはよかった。
22	2012 0103-0104	輝く夜	百田尚樹 講談社文庫 500円 (古150円)		クリスマスの夜を舞台に奇跡が起きる1話40頁ほどの短篇集。お約束ものといっている程どれもベタな作品ばかりだが聖夜だから許される内容。幸せな気分になりたい人が読む本。

23	0105-0109	ジェノサイド	高野和明 角川書店 1,890円 (古1,200円)		戦争アクションものかと思って読み始めたがスケールの大きいSFものだった。 現代医学やネット社会、国際紛争、経済など多岐にわたる情報を駆使しながら現代社会の危うさ、人類の凶暴性のしくみを描いたもので久しぶりに濃密で面白い作品。
24	0110-0113	図書館戦争	有川浩 メディアワークス 1,680円 (古450円)		タイトルを見て購入したものの本にまつわる話はほとんど無くがっかり。いわゆる良書のみ残し悪書を排除しようとする良化法に基づく政府機関と独自の図書館法によりあらゆる書籍を守る者たちとの戦いを書いたもの。自衛隊の学園青春ものといった感じで中高生の時なら面白く読めたかもしれないがちょっと軽すぎるかな。
25	0114-0116	株価暴落	池井戸潤 文春文庫 580円 (古200円)		著者の描く銀行ものも大分読み込んでおりパターンも見えてきているものの今のところつい手がでてしまう。巨大な権力に立ち向かうところにカタルシスがあるからだと思う
26	0117-0120	日曜日の夕刊	重松清 新潮文庫 704円 (古175円)		正月からいろいろZARDの情報が入ってきたおり、この短篇集の中に1、2行ZARDが出てくる作品があったなと思いブックオフで見かけて購入。いろいろな家族を描いた12編の短篇集。重松清の作品には格好悪いおとうさんや家族が出てくるものが多いがどれもちょっとした心境の変化がもたらすささやかなハッピーエンドが良い。
27	0121-0122	プリズン・トリック	遠藤武文 講談社文庫 700円		刑務所の中での密室殺人という帯の文句に惹かれて購入。交通犯罪と一般の犯罪者と扱いが違うというのはドラマで見たことがあったが刑務所が別というのは知らなかった。舞台は千葉の市原刑務所をモデルにしておりここだからこそ可能なトリック。ちょっと肩透かしの作品だった。そのかわり交通犯罪者の刑務所暮らしがよくわかる。

28	0123-0128	凍りのくじら	辻村深月 講談社文庫 820円 (古225円)		藤子・F・不二雄を先生と呼ぶ父親を持つ娘、理帆子。藤子・F・不二雄が「僕の描くSFはサイエンスフィクションではなく少し不思議な物語」と発言したことから理帆子は友人・知人を少し不満、少し不足、少し不在などと分析する癖を持つ。上から目線の理帆子の個性に不快感を持ちつつ読み進めたが彼女の家庭事情が一因となっているのも事実。訳ありの先輩若尾に声をかけられたのをきっかけに取り巻く人間関係に変化が起きる。章題にはどらえもんの道具が付けられていてそれに困んだ会話を含むのが決まりになっている。
29	0129-0131	JOJO7' S BIZARRE ADVENTURE OVER HEAVEN	著・西尾維新 原作・荒木飛呂彦 集英社 1,470円 (古800円)		少年ジャンプ「ジョジョの奇妙な冒険」の圧倒的な敵役として存在するディオの側から全シリーズの裏側を書いたスピンオフ小説。敵役なので結果、負けるばかりで言い訳がましくなるのは仕方がないとしてももう少しいいところも書けなかったのか。あまり面白くない。 小説ではないが劇画のスピンオフ作品の岸辺露伴ものは成功しているので今後もノベライズをするなら一考して欲しい。
30	0202-0205	龍神の雨	道尾秀介 新潮文庫 662円		たまたま雨が降っていたために登場人物たちの中に芽生えた思惑が重なって殺人が起こる。龍神の伝説をうまくからめたストーリー運び。意外な人物が犯人になるのは道尾秀介の得意とするところ。途中で実は真の犯人はピンときたが細かい設定までは頭が回らなかった。最後はちょっと切ない幕切れで現実には義父の行動にここまで鈍感なのはありえない。
31	0206-0209	大江戸生活体験事情	石川英輔 田中優子 講談社文庫 560円 (古150円)		江戸ものを得意とする作家の石川と江戸研究者の田中が江戸時代の道具を手作りし実際にそれを使って1・2年生活した体験を踏まえて考察したもの。 1時間の長さが太陽・月によって決まる不定時法、陰暦・太陽暦による生活、行灯、火付け、着物、筆など長期体験してみないとわからない気づいたことを紹介し江戸時代ならではの合理性を示し、便利な暮らしの裏には膨大な設備・金額・人手・エネルギー消費がありいつまでもあるか保証できないことを警鐘している。
32	0210-0214	茶の湯事件簿	火坂雅志 淡交社 1,890円 (地区センター)		茶道は戦国時代、身分の上下に拘わらず密室性の強い茶室で相対することができたせいで密談・情報収集の場として活用されたことから発展。茶道具も銘品を持つことによる権力者の権威付の道具、資産・贈答品として扱われる事も多くなった。そんな戦国時代から昭和の時代に至る折々の茶の湯にまつわる事件、茶道具の由来をエピソード仕立てにして書いたもので小説とは違う人物像や茶道の本質が見えてくる作品。

